

巨星墜つ——森口繁一先生を悼む

1916年9月11日小豆島で誕生、激変の時代を常に時代の先端を切って生き抜いた日本OR学会元会長森口繁一先生が、満86歳の誕生日を迎えて間もない去る10月2日23時59分逝去されました。まことに痛恨の極みです。

伝えられるところによると幼少時から神童の誉れ高く尋常小学校は飛び級で5ヶ年で終え、旧制第三高等学校（京都）では当時の岩波の数学や物理学の講座を讀破して教授陣の舌を巻かせたとのこと。実際、伝統的な古典応用数学の本質の理解と技術の駆動力では先生の右に出る者はなかったと言ってよいでしょう。

天下の秀才が集うところと言われた東京帝国大学工学部航空学科に進み、1938年卒業するや直ちに講師になり、1944年には助教授に任ぜられました。翌年敗戦によって航空学科は廃止されましたが、このことが却って戦後の我国の復興に森口先生という稀有の人材を与えてくれたと言ってよいでしょう。先生は、新しい時代の科学技術（統計、品質管理、OR、コンピュータ、数値計算、等々）の広い分野において、地に足の着いた独創的かつ実践的な研究を進めるとともに分かりやすく要領を得た啓蒙的な諸活動（講演、解説記事・著書執筆等）を積極的に行われました。東京帝国大学が東京大学となった後は、工学部応用数学科（旧制）、応用物理学科、計数工学科に籍をおき（1956年教授任官）、新分野“数理工学”の開拓に努め、数多の人材を育てられました。そのような直接の弟子も含めて、先生の恩恵に浴した人達（広い意味での弟子）は数知れず、学界・産業界の広い分野で活躍しています。

東京大学定年退官後は、先生は電気通信大学に5ヶ年、東京電機大学に5ヶ年教授として奉職されました。その後も、研究活動を続け、また啓蒙記事・著書の執筆にも励んでおられました（昨年11月に岩波書店から出した“数理つれづれ”がおそらく最後の単行本でしょう）。ほぼひと月ごとに御自宅で“松庵サロン・コンGRESS”を開き、広い話題について森口流の思想を楽しみながら参加者に懇々と諭して下さっていました。その第70回目が9月21日に開かれる直前に急に入院され、内容目次まで出来上がっていたお話を伺え



ずに終わってしまいました。また、新しい著書の構想も近くの者に漏らしておられました。返す返すも残念でなりません。

OR学会とはその創設期から関わり、多くの要職を務められました。会長職にあった1975年に日本でIFORS/TIMSの世界大会を開催されたことは、いまだに世界の関係者の脳裏に刻まれています。情報処理学会、統計学会、等においても重要な会員でありました。政府関係の委員会にも数多く関係されましたが、就中、統計審議会会長（1978～1986）、国際統計協会会長（1985～1987）を務め、1987年に同協会の大会を東京に招致・主催されたことは特筆に値しましょう。

海外との交流についても熱心でした。1950年から2ヶ年間、まだそのような例が少なかった頃、米国ノースカロライナ大学大学院数理統計学科に在籍、1961年からの1ヶ年同じくコロンビア大学、スタンフォード大学に客員教授として訪米されました。その頃先生が我々にもたらされた海外情報は非常に新鮮で刺激的なものでした。特に線形計画法の教祖と言われるGeorge B. Dantzig教授とは親しく交際されていました。年齢が近いこと、そしてほぼ同じ頃（森口先生68～69歳）心臓のバイパス手術を受けられたことなどもあったからでしょうか。日中国交回復直後、まだ

毛沢東主席健在の頃中国を訪問して、三下三上で知られる鄧小平氏と会って氏の勝れた考え方に感銘を受けたと話しておられたことも思い出されます。ORの立場から発展途上国の“発展”のあり方についても論じられていましたが、御自身で技術指導にも積極的にかかわられました。

日科技連、日科技研、三菱総研等を通じて、今顧みても非常に先進的なOR活動を指導しておられました。講習会を通じての啓蒙活動はもちろんのことですが、国鉄、国土庁、建設省（いずれも当時）等からの委託を受けてORチームを編成して多種多様なORの問題を手掛けられました。（故奥平耕造先生が問題提起に貢献され、森口先生がそれを適切に定式化されていたのを筆者も近くで見ていて大変勉強になったのが強く思い出されます）。その中には、OR学会（論文）誌に論文として発表されているものもありますし、今ブームになっているGIS（地理情報システム）の走りのようなものもあります。

お若い頃の御自分の仕事を後になって思い出し懐かしく語られたことの中には、まだ学生だった頃に“守屋の翼理論”（守屋富次郎＝東大航空学科教授）は複素関数論的に見て特異点の配置が適切でないのをそれを改良したらすっきりしたよいものになったということもあります。また、数年前にお書きになり東大出版会から出版した「確率表現関数」は先生の米国留学・遊学時代の研究成果を反映したのですが、数理統計学の新しい観点からの入門書としてもユニークなものであるとともに、極値統計量の分かりやすい解説書でもあります。さらに、この立場からすると例えばKolmogorov-Smirnov検定に改良の余地があることが示せると先生御自身が指摘されています。国際標準、JIS等の重要性も強調されていました。自分のお名前のローマ字は訓令式の“Moriguti Sigeiti”で通されました。

このような広く深い先生の御業績に対して多くの賞・章をお受けになっているのは当然でありましょう。その一部を挙げると、デミング賞（1955）、通商産業大臣表彰（1969、1973）、藍綬褒章（1978）、勲二等旭日重光章（1995）などがあります。

日本人の平均としては天寿を全うされたと言えるか

もしれませんが、一生を学者・研究者として過ごされた森口繁一先生を今失うことは我々OR界にとって計り知れない損失です。しかし、我々が先生の御遺志を継いでORの普及・発展を進めることが先生の御冥福を祈る最善の道でありましょう。（伊理正夫）

故森口繁一氏略歴

大正5年9月11日香川県小豆郡苗羽村生まれ、小学校尋常科・中学校は小豆島で終える。

〔学 歴〕

昭和7年～10年 第三高等学校理科甲類
 昭和10年～13年 東京帝国大学工学部航空学科
 昭和50年～52年 米国ノースカロライナ大学大学院数理統計学科

〔学 位〕

昭和29年11月 工学博士（東京大学）

〔職 歴〕

昭和13年4月 東京帝国大学工学部講師
 昭和19年12月 東京帝国大学助教授
 昭和31年3月 東京大学教授
 昭和35年～36年 米国コロンビア大学、スタンフォード大学客員教授
 昭和43年～44年 東京大学評議員（工学部選出）
 昭和52年3月 東京大学定年退官
 5月 東京大学名誉教授
 昭和52年～57年 電気通信大学教授
 昭和57年～62年 東京電機大学教授（嘱託）
 昭和47年～61年 統計審議会委員（昭和53～61年会長）
 昭和60年～62年 国際統計協会会長

〔受賞・受章〕

昭和30年11月 デミング賞
 昭和53年11月 藍綬褒章
 平成2年4月 勲二等旭日重光章

〔OR学会関係〕

評 議 員 昭和32～平成13年度
 副 会 長 昭和35～36年度、昭和42～46年度
 理 事（編 集） 昭和42～45年度
 IFORS日本代表 昭和46～48年度
 フ ェ ロ ー 昭和47年度
 会 長 昭和49～50年度
 名 誉 会 員 昭和52年度